

東日本大震災の被災地を「食」で支えようと、国際医療ボランティアAMDA(岡山市北区伊福町)の呼び掛けに賛同した「AMDA支援農場」が、現地に米を送る活動を続けている。2013年度のスタート以降、

東日本大震災
5年

送付量は3500^{キロ}以上。AMDAはさまざまな協力者・団体を募っており、支援先の拡大のほか、南海トラフ地震を想定した食料の調達システムの構築も目指している。(水嶋佑香)

13年度スタート AMDA支援農場



被災地を「食」で支えようと、2015年度にAMDA支援農場から提供された米=昨年12月

AMDAによると、個人農家を中心に、農業高校などを支援農場に認定し、現在は県内の59個人・団体が活動する。米を収穫する秋以降、1個人・団体当たり30^{キロ}を上限に提供してもらい、13年度は1350^{キロ}、14年度は1440^{キロ}を送付。15年度も12月時点で千^{キロ}を既に超えた。

米の届け先の中心は現地在、仙台市でホームレス支援を手掛けるNPO法人「仙台夜まわりグループ」。同法人によると、現地では復興事業に伴う雇用が活気づく一方、短期で解雇され、次の職に就くまでの間、路上生活に陥る30~40代が目立つ。AMDAの支援が始まると、おにぎり

「送ってもらう米には支援をする側、受ける側の距離を縮める力がある。食事中は相談しやすい」と同法人の今井誠二理事長。支援農場世話人

被災地「食」で支える

3500^{キロ}を超える米を送付

の赤木歳通さん(69)は岡山市東区升田。「私たち農家は支援したいと思ってもなかなか手段を見つけれない。困っている人の元に届くシステムはありがたい」と話す。

米の一部は県内で貧困対策を目的に子どもへ食事を提供する団体にも託しており、AMDAは支援農場をさらに増やして送付先を拡大。災害時の炊き出しに用いる食料を調達できる仕組みづくりも検討しているという。

AMDAの成沢貴子理事長は「食は医療以上に生きる上で不可欠なもの。AMDAのネットワークで農家のみなさんの思いをつながせてほしい」としている。支援農場に関する問い合わせはAMDA(086-2152-7700)。